

中国農業研究（論文 011）

日本興業銀行 調査部・産業調査部編(1997)「第 部 変貌する中国経済 第6章 食糧問題と今後の課題」『中国 2001年の産業・経済』東洋経済新報社。

研究対象

いつ：1978年以降。中長期展望あり。

どこ：中国。

だれ：外国人研究者。

なに：食糧問題業。生産性分析、農産物の消費構造分析、食糧需要抑制政策、食糧需給見通し、農産物流通。

目的：「食糧問題と今後の課題」(タイトルより)

枠組・アプローチ

- ・経済学的。
- ・現状分析。

ポイント

生産性の向上で穀物を増産

中国では耕地の開墾が進められる一方で、工場や住宅用地への転用から耕地面積が減少しているが、作付け率の上昇があったため、総作付け面積はほぼ横ばいで推移してきた。

食糧の作付け面積は商品作物に押され過去20年間年平均0.5%の減少傾向をたどる一方で、単収(単位面積あたりの収穫量)の向上が食糧増産を支えてきた。この15年間で米の単収は年平均2.5%、小麦は同4.3%、トウモロコシは同3.2%の増加が見られた。これは、主に、灌漑面積の増加、肥料投入量の拡大、耐寒・高収量品種への改良および北部地域の二毛作拡大などを通じて達成されたものである。

主要国の穀物単収を比較すると、中国は1ヘクタールあたり4.5トンであり、米国の5.1トンよりは劣るものの、アジア(中国・中近東を含む)平均の2.9トン、欧州平均の4.1トンを凌いでいる。一方、穀物生産1トンあたり農業従事者数では、アメリカが7.1人であるのに対し中国は1166人であり、農村の過剰労働力の存在とともに、著しく零細で労働集約的な小農経営が中国農業を支えている実態を表している。

高成長が加速する食糧消費

需要面

第1、人口増加の影響

第2、80年代後半から特に沿海都市部を中心に食肉、牛乳、卵の消費量が急増しており、飼料用食糧としての間接消費が大幅に拡大している。78年以降の食用穀物消費は年平均1.4%の増加であったのに対し、飼料用消費は同5.8%のペースで伸びた。

『主要国食糧需給表』FAO(国際連合食糧農業機関)

84～86年の投入飼料1トンあたりの食肉生産量

日本 0.19ト 米国 0.18ト 中国 0.46ト

* 中国は飼育法(草や残飯を利用)が違う。

* 将来は穀物による肥育方式の普及によって、飼料用食糧需要が増大する可能性がある。

世界の食糧相場を高騰させた95年の大量輸入

中国は長らく、食料の輸出(米、トウモロコシ)と輸入(小麦)を併存させてきた。

94年には426万トンの純輸入だった食糧貿易は、95年に1,867万トンの輸入超過に転じた。こうした中国の大量輸入は、折からの米国における低水準の穀物在庫状況、トウモロコシの作柄懸念と相俟って国際穀物市場における価格急騰を引き起こすこととなった。

小麦価格

95年1月 1ブッシェル 4.25ドル

96年5月 1ブッシェル 7.13ドル

トウモロコシ価格

95年1月 1ブッシェル 2.34ドル

96年7月 1ブッシェル 5.43ドル

国内物流システムが食料価格高騰の一因

中国でも95年初以来食料価格が急騰、95年全体では前年比36.8%上昇した。しかし、結果的には95年の食糧生産は前年比4.8%増の史上最高を記録した。こうした供給増大のなかで穀物価格が急騰し史上最高の2,081万トンにのぼる輸入が発生したのは、中国に特有のいくつかの複合要因によっている。

第1、食糧増産を狙って94年から行われた政府穀物買付価格の引き上げと、自由市場での余剰穀物の価格自由化によって小売価格が上昇したことによる。この価格上昇は、当時開放された穀物先物市場における投機によって増幅される結果となった。

第2、輸送（特に鉄道による）手段や倉庫の不足など物流システムの不備により、地域間の食糧移動に限界が生じたほか、豊作時には買い上げに手が回らず、生産された食糧が無駄になるなどの問題があった。94年から95年にかけても食糧不足地域への食糧移送がうまく行かず価格高騰の原因となったケースも報告されている。

第3、輸送ボトルネックの存在から、沿海消費地の場合、内陸部からの移送に頼るより輸入を活用した方が、物流面で合理的な状況があったことによる。特に94年から95年の価格急騰時には、国内価格が国際価格を上回り、政府も国内市況を冷ます目的で穀物を輸入した経緯があった。

食糧政策と将来の政府需給見通し

第9次5カ年計画（1996～2000年）

- ・2000年の食糧生産の目標を5億トンに設定。